



Title	宮津フィールドワーク概要
Author(s)	白坂, 千里; 高木, 千恵
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2015, 13, p. 10-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51435
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

宮津フィールドワーク概要

白坂 千里・高木 千恵

1. はじめに

2014年度の「社会言語学演習／特殊演習」では、京都府宮津市をフィールドに、当該方言をめぐる方言学的・社会言語学的研究を行うべく臨地調査を行った。調査は次年度も継続する予定であるが、本号から随時、調査結果の報告を本誌に掲載していく。そこで本稿では、宮津フィールドワークの全体についてその概要を述べることとする。以下、2節で調査の概要を示し、3節ではフィールドとなった京都府宮津市について、地域概要、方言的特徴、および人々の言語生活を中心に述べる。4節はまとめである。

2. 調査概要

調査は2014年9月2日から5日の4日間で行った。調査員は大阪大学大学院の教員および学生で、筆者ら（白坂・高木）の他に次の8名が参加した。

上林葵、酒井雅史、張允娥、高谷由貴、野間純平、韓娥凜、松井祐治、小田佐智子

また、調査には参加していないが、調査票作成と分析には原田走一郎（大阪大学大学院生）も参加している。

調査項目は、宮津（および宮津を含む丹後地方）をフィールドとした先行研究を踏まえ、フィールドワーク参加者それぞれがテーマを設定し、演習のなかでの検討を経て表1のように決定した。

表1 調査項目と担当者

調査項目	調査票作成者	調査員
①語彙	小田・韓・上林	全員
②活用・コピュラ	原田	小田・白坂・高木
③準体助詞	野間	野間
④アスペクト	松井	松井
⑤否定表現	高木	上林・白坂・高木
⑥敬語（待遇表現）	酒井	酒井・高谷
⑦話し相手の性別とことばの使い分け	張	張・高谷・韓
⑧人称表現	韓	小田・上林・張・高谷・韓
⑨言語意識	上林	小田・上林・張・高谷・韓
⑩言語生活	白坂	上林・白坂・高谷

調査はいずれも調査票を用いた面接調査の方法をとった。調査票は、先行研究などをも

とに各自が立案したものを演習内で検討し、作成した。また表中の①～⑩に加え、2 拍名詞を中心とした語のアクセント調査も行った。アクセント項目の調査票作成にあたっては甲南大学の都染直也先生に全面的にご協力いただいた。

表 1 に示した調査項目のうち、⑩「言語生活」の結果については本稿で触れる (3.3.)。また⑥「敬語」の報告も本号に掲載している (酒井雅史「宮津における素材待遇形式ナル」)。なお、調査票を用いた面接調査のほか、現地ではインフォーマント同士の自然談話の収録も行うことができた。今後、調査結果の考察を深める資料として活用する予定である。

本調査では、宮津市宮津地区と日置地区在住の高年層の方にご協力いただいた (地区については次節参照)。インフォーマント情報は表 2 のとおりである。なお、どのインフォーマントに対してどの調査を行ったかに関しては個別の報告論文を参照されたい。

表 2 インフォーマント一覧

地点	ID	性別	生年	調査時年齢	地区外の居住歴
宮津	MAM	男性	1930	84	6-38: 与謝郡伊根町 ^{よ さい い ね}
	MBM	男性	1931	83	18-22: 京都市
	MCF	女性	1933	81	なし
	MDM	男性	1935	79	15-17: 京丹後市
	MEM	男性	1936	78	なし
	MFM	男性	1941	73	42-45: 福井県、45-51: 亀岡市
	MGF	女性	1941	73	なし
	MIM	男性	1935	79	なし
	MJF	女性	1938	76	0-15: 宮津市養老
	MKF	女性	1935	73	0-15: 宮津市養老、15-18: 東京都
	MLF	女性	1947	67	なし
日置	HAM	男性	1930	84	14-19: 綾部市
	HBM	男性	1931	83	0-13: 宮津市養老、13-15: 福知山市、 15-27: 宮津市養老、27-35: 舞鶴市、 35-38: 大阪府、38-45: 京都市
	HCM	男性	1931	83	19-28: 京都府、28-33: 綾部市、33-39: 舞鶴市
	HDM	男性	1940	74	18-58: 京都市、58-62: 大阪府
	HEM	男性	1941	73	なし
	HFM	男性	1944	70	18-19: 綾部市

3. フィールド概要

宮津市は内部に 10 の地区があるが、今回の調査における主なフィールドは宮津地区と日置地区である。以下、宮津市の地理や人口などを概観した後、方言区画について述べ、今回の調査で明らかになった宮津・日置の高年層の人々の言語生活について述べる。

3.1. 宮津市概要

本節では、宮津市の概要を主に『宮津市史』を参照しながら紹介する。京都府宮津市は京都北部に位置する日本海の宮津湾に面した地域で、市内に日本三景の天橋立がある。1954年6月1日に与謝郡宮津町・栗田村・吉津村・府中村・日置村・世屋村・養老村・日ヶ谷村が合併し、市制が施行された。さらに1956年9月20日に加佐郡由良村を編入し、現在の宮津市となる。北部は京丹後市、西部は与謝郡、南部は福知山市、東部は綾部市・福知山市にそれぞれ隣接している。天橋立は宮津湾と内海の阿蘇海を分ける全長3.2kmの湾口砂州

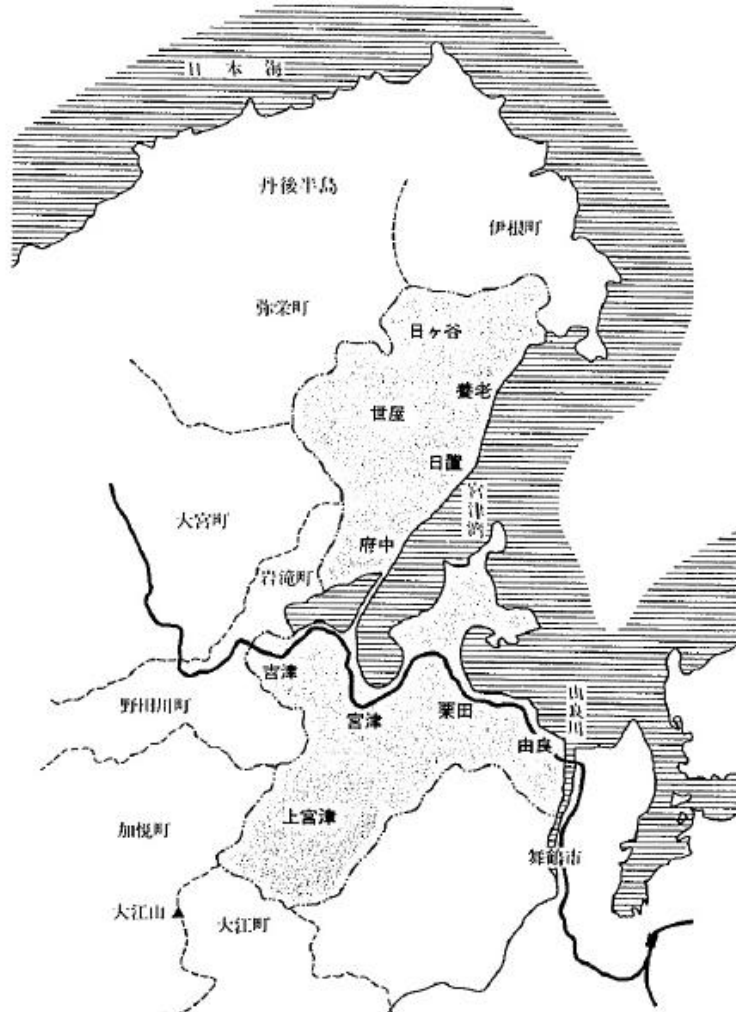


図1 宮津市内の地区名（国立国語研究所1990）

で、川から流された砂が堆積して今から2000年前に海面に顔を出したといわれている。その後拡大・浸食を重ね明治・大正期にほぼ現在の姿になった。現在一般車両は天橋立を通ることができないため、宮津市は与謝郡与謝野町（旧岩滝町）を挟んで南北に飛び地になっている。京都府の中心である京都市から宮津市の中心地である宮津地区までは、車であれば京都縦貫自動車道を経由し、公共の交通機関であればJRや北近畿タンゴ鉄道宮津線を利用し、どちらも2時間ほどで行くことができる。宮津市内における移動についても道路が整備されており、宮津地区内から丹後半島北部の伊根町までは車を使えば国道178号を通って片道40分ほどで行き来できる。

京都府は日本海型・瀬戸内型・内陸型の三気候に区分できるが、宮津市は冬に降水の多い日本海型であり、舞鶴湾沿岸地域および丹後半島内陸部と共通の性質をもつ。冬の気温は温暖で平均気温は京都市内と同程度となるが、冬の平均降水量が2000ミリに達する地域も多い。この地域は台風シーズンの9、10月には豪雨が襲うことが多く、2013年には台風の影響で由良川が氾濫、隣接している福知山市は甚大な浸水被害にみまわれた。

市全体の面積は169.32 km²、総人口は平成22年の国勢調査によると19,948人である。市

内には北部に日ヶ谷地区、養老地区、世屋地区、日置地区、府中地区、南部に吉津地区、宮津地区、上宮津地区、栗田地区、由良地区がある。各地区の人口分布を示した次の表 3 からわかるように、宮津地区に市全体人口の約半数が集まっている。さらに市役所や大型商業施設も同地区にあり、市の中心地は宮津地区である。

表 3 宮津市内地区別人口分布（宮津市ウェブサイトより）

区分	世帯数	人口			構成比 (%)	
		総数	男	女	世帯数	人口
宮津	4,227	9,678	4,571	5,107	51.7	48.5
上宮津	546	1,217	569	648	6.7	6.1
栗田	798	2,203	1,065	1,138	9.8	11
由良	458	1,125	513	612	5.6	5.6
吉津	674	1,742	821	921	8.2	8.7
府中	657	1,873	837	1,036	8	9.4
日置	271	747	344	403	3.3	3.8
世屋	59	114	53	61	0.7	0.6
養老	392	1,032	501	531	4.8	5.2
日ヶ谷	98	217	101	116	1.2	1.1
合計	8,180	19,948	9,375	10,573	100	100

産業構成については、合併直前（昭和 29 年）の時点で、都市的業態（第二次・第三次産業）の占める割合が全体の 6 割ほどで、すでに農業を中心とする第一次産業をしのいでいた。この都市的業態は旧宮津町域に集中しているが、その対極にあるのが日ヶ谷・世屋・日置で、これらの地域は農林漁業といった第一次産業が中心の地域である。サービス業と運輸業も宮津地区に集中しており、当時から同地区が商業・流通センターとして機能していたことがわかる。

3.2. 方言概要

奥村（1962）による京都府の方言区画（次頁図 2）をみると、宮津市は南部と北部が異なる方言区画に属する。宮津市北部は京丹後市や与謝郡の大部分と同じ方言域である。奥村によると、宮津市北部が属する区域（表中 b）と宮津市南部が属する区域（表中 c）とでは、連母音の音変化の有無、アクセント、コピュラなどにさまざまな違いがある。本調査ではこうした点を踏まえ、北部の日置地区と南部の宮津地区の 2 地点を調査地として選び、先述の①～⑩（およびアクセント）の調査項目を設定したわけである。

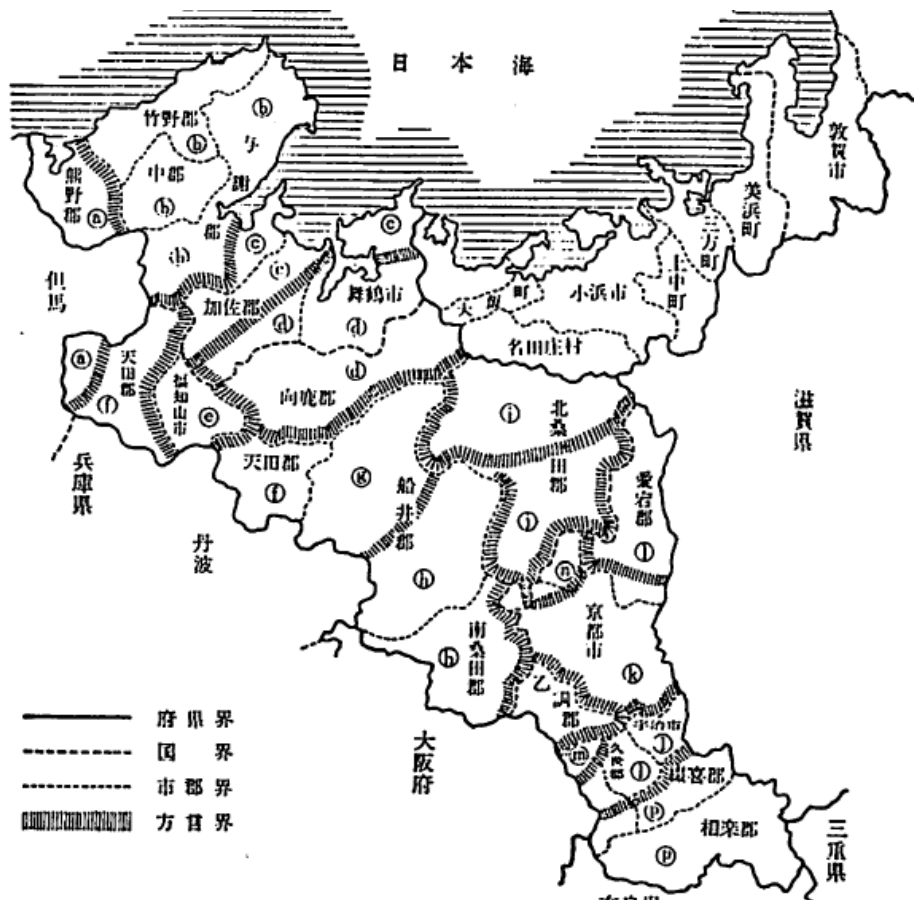


図 2 京都府の方言区画 (奥村 1962)

3.3. 言語生活

本節では、宮津の言語生活の実態を把握するために MAM、MBM、MCF、MDM、MFM、HFM、HAM の 7 名を対象に行った言語生活調査の結果について述べる。主に国立国語研究所 (1990) を参考に設定した「1 日に何回くらい客対応をしますか」「1 日に何回ぐらい近所の親しい人と話しますか」などの質問を通して、調査協力者の言語生活の把握を試みた。その結果、宮津における言語生活は、地域方言が標準語の影響を受けて変容するとしてもなんら不思議ではないといえるものであることが分かった。

具体的な結果について述べると、現在も何か職業に従事している人や地域活動に参加している人は、家族以外の人と話す機会は 1 日に何度もある。しかし、このようなタイプは高年層では少数派といえ、職を退いた多くの人は、路上や出先などで家族以外の人と 10 分以上話すことが 1 週間に 1 回あるかないか、といった程度である。また全体に共通して、近所で物を貸し借りするということもめったにしない。宮津市には天橋立という観光地があるものの、観光客に積極的に話しかけると答えた人も少なかった。つまり多くの人が、地元で長く話す機会をあまり持たない。次に、メディアとのかかわりについては、ラジオの聴取には個人の好みがあるが、回答者全員がテレビを毎日 1 時間半以上視聴している。男性の場合、6 名全員が毎日 20 分ほど新聞を読んでおり、地域の広報誌にも目を通して

る。自らが公的文書を作るといった機会は、退職後になると自治会の役員につくなどの事情がなければほとんどないが、全体としてメディアを通して標準語と触れる機会が多い。その多さは地元で話す機会の少なさとは対照的であるといえる。

国立国語研究所(1981)では東京・大阪といった大都市に住む60代の人々の言語生活の様子が報告されているが、大都市においては、ラジオも聞くがそれ以上の割合でほとんどの人がテレビを毎日みて、さらに新聞・広報誌などのメディアに触れる機会が多い。回答様式も人数も異なるため結果の単純な比較はできないが、標準語との接触度合いという点において、宮津高年層の言語生活は大都市と似通っているといえるのではないだろうか¹⁾。

4. おわりに

以上、本稿では宮津フィールドワークの概要を述べた。引き続き次年度も現地調査を行い、順次、調査結果を本誌にて報告していく予定である。また、談話データの文字化作業も進行中であり、文字化データを用いた宮津のことばの分析も行いたいと考えている。

付記

調査に際し、宮津市教育委員会事務局総括室の永濱敏之副室長、河森一浩氏(社会教育係主査)、西村陽平氏(同・主事)、宮津市日置地区自治連合会会長山本利郎氏、および地区公民館活動指導員の皆様に話者紹介の労を執っていただいた。記して御礼申し上げる。

【参考文献】

- 奥村三雄(1962)「京都府方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂(井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎編(1996)『日本列島方言叢書 15 近畿方言考 3 滋賀県・京都府』ゆまに書房 再録)
- 国立国語研究所(1981)『大都市の言語生活 資料編』三省堂
- (1990)『場面と場面意識』三省堂
- 中井幸比古(1997)「Ⅰ 総論」平山輝男代表編『日本のことばシリーズ 26 京都府のことば』pp. 2-26, 明治書院
- 宮津市史編さん委員会(2002-2004)『宮津市史 通史編 上・下巻』宮津市役所
- 宮津市ホームページ: <http://www.city.miyazu.kyoto.jp/www/> (2015/02/26 最終確認)

しらさか ちさと(大阪大学大学院生)(1、3、4 節担当)

cslanguage@gmail.com

たかぎ ちえ(大阪大学大学院)(2 節担当)

takagic@let.osaka-u.ac.jp

-
- 1) この結果はあくまで本調査で対象とした人々の言語生活を把握したものである。今回の調査協力者のなかに観光産業に従事している人はいなかったこともあり、ここで述べた内容が必ずしも宮津の高年層全体の代表といえるものではないことに注意されたい。